

延岡出身のスーパー偉人「井上八郎」について

延岡の歴史を学ぶ勉強会代表長友 景一

(延高第9回 32 年卒)

今回は、井上八郎について、著作者古川久師さん(延岡教市育委員会勤務)によって昨夏出版された「延陵伝」を皆さんにご案内します。この文面を寄稿するに当たって、古川さんに会報誌掲載をご相談申し上げたところ、即刻ご快諾をいただきました。

その内容については、井上八郎という余りにも偉大な人のため、浅学の私の筆力では恐れ多く、ここでは概略だけに留め、ご感心のある方は、作者古川さんの膨大な時間をかけて調査精査の上の力作「延陵伝」をご購入され、ご一読下さいますことをお奨めします。

(出版社 〒880-8551 宮崎市田代町 263 鉦脈社 0985-25-1758)

開国か攘夷か、幕府終焉に向けて薩長土肥の西南雄藩が動く。勝海舟、坂本龍馬らの中に延岡出身の井上八郎がいた。

幕末の混乱が続く中、時代は明治へと変わった。井上八郎は一大名となった徳川慶喜の御側御用人に任ぜられる。新政府の樹立で行き場を失った幕臣たちを前に、八郎は「大きな流れに不満を持つだろうが、それに対抗しては戦国の世に逆戻りだ。今は不満を申し立てる場合ではない。そのことを一番よく分かり、我が国の将来を思い新政府に恭順しておられる慶喜公のお心を察して耐え忍ぼう。今は、諸外国に対抗できる力を養わなくてはならない。諸君らが死んで役に立つのか。生きてこそ働ける。一丸となってこの難局を乗り切ろう。そして、共に、駿府に入って慶喜公を支えよう」八郎は血の出るような言葉で力の限り説得し、駿府に向かった。駿府に入るとすぐに、慶喜に呼ばれ「井上よ、お主を幕臣に取り立ててからの働き、特に江戸に帰ってからの忠義の姿勢は、勝(海舟)や、山岡(鉄舟)と並んで最も目覚ましいものであったなあ。徳川を見捨てず、多くの旗本たちの命を救ってくれた」この言葉に、延岡で町人の子として生まれ育った八郎の胸に、込み上げてくる感動を静かに抑えていたであろう。そして慶喜から「ところで、浜松城代として、私に代わって遠江一円を治めてくれぬか。浜松と中泉の奉行職について欲しい。この仕事ができるのはお主しかいない」と指名を受けた。八郎は、前将軍 14 代家茂の上洛に警護職として従い、京の町の浪士取締役に命ぜられている。徳川家への忠義を尽くしての働きぶりと、人格の高潔なことが慶喜の信頼を厚くしたのでらう。

時代は江戸末期に戻るが、鳥羽伏見の戦いの後、甲府の治安維持に出向いていた八郎は、江戸に戻ると、すぐに、勝海舟に呼び出され歩兵奉行に任ぜられる。旧幕府の幕臣、旗本らをまとめ戦闘を防ぐ役である。この時期、新政府は多くの旗本を束ねる八郎の力が必要であった。新政府軍の大村益次郎は、上野の山に籠る彰義隊の掃討を決めた。八郎は大村と会談を持ち、無用な戦闘は避けるべきだ。明日の決行は譲れぬ。などの応酬のあと、今晚中に説得をするならと了解を取

り付けた八郎は、彰義隊の首領と面会するが、筋は曲げられぬと決裂する。八郎は彰義隊の隊士に別れの一言を残す。「戦闘に破れ新政府軍に捕縛されそうになったら『自分は井上八郎の配下である』と言い武器を捨てて我が屋敷に駆け込むのだ。必ず保護する」事前に大村に見逃してくれと承諾を受けていたことではあるが、これにより多くの彰義隊士が井上の元に駆け込み命が救われている。700万石の将軍職から70万石の大名となって駿河に向かう慶喜(このとき31歳の若さ)は、八郎が、元の自分の部下をこれまでにして、守ってくれたのかと、辛いこの時期、胸中の片隅に静かに刻まれたのだろう。

明治元年9月、井上八郎は浜松に入った。江戸からつれてきた者、行き場をなくした者、駿府に集まってきたすべての者が生産する経験、技術を持たない旗本たちばかりである。八郎は、地元からの年貢に頼らず自分たちで食い扶持を稼ぐ、そのために、それらの者を農業に就かせることにした。三方ヶ原の開墾に手を付け、用水を引いて水田を、また、茶畑を造成した。皆は生き残りの為に真剣に働いた。

次に、八郎は、浜松に住む者、武士も農民もない、みんなが富めるように産業を興し、浜松の発展に取り組んだ。まず、産物の藩外への運び出しと必要な物資の搬入のため浜松市街と浜中湖の舟運関連の整備を急いだ。鉄道の東海道線の開通までには20数年先の頃である。水路掘削には静岡藩庁の許可申請が要るが、資金調達のために認可前の工事を始めた。強引ではあったが、八郎には当然のことながら藩庁より出頭の命が来る。出向いてみると権大惨事(副知事級)は不機嫌にも、一步も引かない八郎とは平行線が続いたが、最後は水利課へ廻ることを承諾した。水利課へ行ってみると、いきなり「あっ、井上先生、お久しぶりです」の声、この責任者の課長は、八郎のかつての門人だった。問題なしということで異例の早さで許可が出た。こうして出来た運河は八郎の名字、井上と同僚の田村から取って「井ノ田川」と呼ばれている。井ノ田川が完成したのは明治4年(1871)八郎56歳の時である。

八郎は、名を井上延陵と改め浜松の高台で隠居生活を送ろうとしていた矢先、新政府は延陵のこれまでの数々の功績を忘れていなかった。突然に、「三池県権参事を命ず」の辞令が届く。延陵の決意は固く、即辞退した。にもかかわらず、政府は、転居せずに済む役職を用意し「静岡県七等出仕を命ずる」の辞令を出すも固辞される。その後も数回、太政官令を出すなど延陵を復職させようと説得を続けた。

明治政府は、明治8年(1875)に国立銀行条例を公布した。延陵は、預金、貸資金などの金融で庶民の新しい事業の参入と産業の発展に寄与できると、その重要性に気付いた。延陵は浜松の発展になると強く説得を続けて出資金を集め、資本金30万円で政府の認可を得て日本で28番目の銀行「第二十八銀行」が誕生した。株主総会で頭取に推された延陵は、銀行家として最後の奉公をスタートさせた。この時62歳。

明治11年(1878)、明治天皇のご巡幸の祭、この銀行が天皇の宿泊所になり、頭取である延陵は天皇に拝謁することになった。「そなたが、井上延陵か。そなたのことは、侍従の山岡(鉄舟)から繰り返し聞かされている。いつか会いたいと思っていた。」「そなたは、地方の商人の出ながら、剣を持って出世し、山岡に剣を手ほどきし、果ては、徳川に仕えて活躍したと聞いている。」天皇からの身

に余りすぎるお言葉に、延陵は深々と頭を下げ、郷里の父母の姿を心に映し出していたことだろう。

銀行の頭取を辞した延陵は、「浜松は家康公が名を成したゆかりの地だ。それなのに権現家康公を奉る東照宮がないのは惜しいことだ。何とか、建てられないものか。」この話を浜松に赴任してきた権参事石黒務が耳にし、浜松の古城「曳馬城」を買い取って延陵に東照宮建設用地として寄付してくれた。延陵も私財を投じ、広く建設資金を募った。東京から勝海舟が500円、山岡鉄舟からは自身の揮毫した大幟が送られてきた。短期間の内に資金は調達できた。延陵この時69歳である。

社殿は故郷の木を使おうと40年ぶりに延岡の地を踏む。少ない知人を頼って、延岡の木材商を通じて高千穂産の檜が手配でき、延岡大武から船積みをした。

日光東照宮を模した社殿の建設が始まり、明治19年(1886)11月、落成式が挙行され、延陵の最後の仕事をやり終えた。東照宮の境内には、高さ3メートル、幅1.3メートルの顕彰碑「井上延陵君の碑」が延陵死去4年後、浜松の人々によって立てられ、石碑には、漢文で千文字を超える碑文が刻まれている。東京に移り住んでいた延陵は、明治30年(1897)4月、老衰のため、妻芳子に手を握られ81歳の天寿を全うした。

ここで井上八郎について触れておこう。八郎は、文化12年(1815)9月 日州延岡藩城下の南町にある豆腐屋の娘の私生児として生まれる。母親に父親のことは教えてもらえなかったが、身分のある武士で井上主衛であることが後で分かる。(井上主衛の子孫は現在も延岡にご健在である)

八郎8歳になると、近くの光勝寺(船倉町)の寺子屋に武家の次男、三男や町人の子に混ざって読み書き算術を習った。自分の生い立ちを知ると、更に勉学に力が入り、寺の土蔵にあった痛快話、剣豪話の本に興味を引かれるが、塾での習熟度も上位で、書物を次々に読破し知識を吸収し、13歳の時には五輪書を読んでいたという。

八郎は、寺子屋に学んだ後、延岡の豪商、樋口四郎衛門の店に丁稚奉公に出ることになった。働きながら、更に城下で有名な儒学者、内田耕助の塾に入門して漢学、和算術を学び、蘭学の翻訳書を取り寄せ、独学で習得するまでになった。

奉公も3年になると、帳場に座るまでに、番頭代理を勤める立場になっていた。また、内田耕助に、八郎の才能は自分の器を超えていると認められ、内田に勧められて学者になることを決心する。樋口に承諾を貰い、母親に打ち明ける。内田耕助に大阪の高名な学者「大原左近」への紹介状を書いてもらう。八郎は元服しての15歳であった。

大阪の大原左近の邸宅を訪ねるが、大原より、ここを引き払って、江戸に出て新たな研究をすると告げられ、八郎の人生の大きな分岐になることを予想すら出来ないことであった。

神田於玉ヶ池の新しい塾には、向学心旺盛な諸藩からの子弟で溢れ、八郎も当然その中の一人にと腹に決めていた。しかし、武士の血がまだ残っていた八郎には、塾の隣にある剣術道場から聞こえてくる気合いの掛け声が、いつの間にか体全体に響き伝わってくる日々となった。そこは、北辰

一刀流「玄武館」で道場主は千葉周作である。文政5年(1822)に道場を構え、江戸三大道場に数えられた。これからは時代が動き、学問より行動が求められる世になると実感した八郎は、大原左近の了解の下、不退転の覚悟を心に決め、千葉周作の玄武館に入門する。入門すると、竹刀を使って基本の構えの訓練、刀の使い方を理解するための木刀に変えての指導を受ける。北辰一刀流では剣術だけではなく、技を理解し使いこなす剣理も欠かせなかった。

玄武館でも屈指の剣豪となった八郎は、武術の高みを目指し、周作に巡国修行の許しを請う。周作の勧めで、水戸に出向き、藩校「弘道館」の門弟に指導を行った。関東各地の道場で他流試合に臨み腕を磨いた。諸国で剣術修行を積み、江戸に戻った八郎は、玄武館の塾頭に就任し、更に文武を極めることになる、33歳の時である。

※写真は浜松在住の級友 長坂芳夫君(延高32年卒)提供

